長編小説

若者はゆく

山内　久・原案　津軽十三・著

文理書院

山内　久・案
津軽十三・著

若者はゆく

文理書院

9
ツ

若者はゆく　　¥ 390

1969年6月20日　第3版発行

著者　津軽十三

発行所　郵便番号 162
東京都新宿区喜久井町51　株式会社　文理書院
振替・東京 196621
電話 (202) 9611 (代)

書籍コード　0093—144019—7398

・図書目録御申込みしだい進呈。　(印刷・大文社)
・本社の本が書店にないときも本社にはありますから書店に取寄せてくれるよう御注文になれば一週間位で入手できます。
・直接御送金下されば至急送本いたします。

《人間は我慢するために生まれてきたのではない》

山内　久
（「若者はゆく」シナリオ作家）

自分が勉強しなかった親ほど、勉強しろ、勉強しろと言いすぎるようだし、自分が大きな会社に入れなかった親ほど、大きい会社へ入れ、大きい会社へ入れと言いすぎるような傾向がある。まるで、大きい会社に入って、小さい根性で生きることが理想のように言うのは、つまりは、自分の人生が失敗したということを告白しているようなものではないか。

何のために勉強するのかという根本的な問題などは、まるっきり失礼してしまって、子供が学校へ入ると、上の学校へ入るまでは我慢して勉強しろと言い、上の学校へ入れば、就職するまでもうひと我慢だと言い、就職すれば、課長、職長になるまで我慢、我慢と言い、そのうち子供が生まれれば、今度はその子供のために、停年まで我慢しろと言う。

それではまるで、人間は子孫代々、ガマンするために生まれてくるようだし、ガマンが人生の目的ですかと聞き返したくなる。こういう不思議な状態が、どうして起ってきたのだろうか。

合理主義、科学万能主義という言葉は、結局は生産のため、企業競争のためにのみ使われ、真に人間を生かして行くための合理も科学も、まるで無い。本来、そういう状態を打ち破って行くべき政治

の中にも、合理的非合理、科学的非科学は明らかに反映しているし、それが、政治への絶望を生み、「早とちり」にも、人間への絶望と変り、回路全体を吹き飛ばすほど短絡して、ゲバ棒が狂う。だからこそ、負け目になっていたら、何一つ変らないぞということ以外に、つまり、社会発展の法則は、それにかかわり合う人間の熱情なくしては、決して正しくは法則化して行かないのだということ以外に、今言うべき何があるだろう。

巨大組織、巨大機構が形成されて行けば行くほど、それらの変動は、より多くの人間の運命にかかわることになるから、無意識に変革を忌避しようという気持が一般化することは、一面、自然の成り行きだが、組織や機構自体、本来、人間のために存在するものである以上、人間を置き忘れた機能主義、合理という名の非合理、科学という名の非科学の壁は、どうしても打ち破らなければならない。

そのために持続的なエネルギーをどこから汲み上げるか。理屈を並べたてるだけで足りるはずはない。自由とは必然への洞察であり、一つの原則の上に立って創造的に生きることである以上、迷信的な先入主を排し、果敢に実行し、その失敗や半失敗の中から、理論の不足を洗い出して行く態度、しかも、それを繰り返して倦まない態度、つまり、そういう意味での認識の強固さがなかったら、この厚い壁は決して打ち破れない。ただ、そういう意味での若さや柔軟さ、本当の意味での若々しさは、朝、小鳥が鳴く声にも感動する繊細な魂の中にしか宿らない。

荒びた心の中に自由は無い。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

《私自身の問題》

山本　圭
（俳優・三郎の役）

前作の「若者たち」を見た数多くの人達から、私の演じた三郎という役についての多くの意見を聞きました。

〃理想的すぎる、あのままでは決して今の世の中でやっていけない。スーパーマン的すぎる〃というものや、〃いや、今のような乱世だからこそ、三郎のイメージは大切なのだ〃というものなど、興味あるものでした。「若者はゆく」で再び私のところへ三郎がやってくるについては、いろんな意味で責任あることと感じたわけです。

作家の山内久さんも、監督の森川時久さんも、そんな声に応えるかのように、三郎をギリギリのところまで追いつめてきているようです。

三郎は本当にスーパーマン的すぎるのか、「若者はゆく」のように曲り角に立たされた三郎が、どうすれば自分の道を歩んで行けるのか、それは、映画の中だけのお話ではなく、いつのまにか、私自身の問題になってきているようです。その問題を、私が三郎の役を演ずることで、どう消化することができたか、それは再び映画を見てくださるだろう人達からの、多くの声を待ちたいと思います。

《ものを見つめる目が光っていたら……》

佐藤　オリエ
（俳優・オリエの役）

二年振りに五人の兄弟が佐藤家のセットで顔を合わせました。さっそく「しわがふえた」「たるみがきている」と傷つけ合いが始まりました。ドラマの中の五人は、三年の間に、それぞれ成長しふくらんでいるように思えます。

さて、この人間的なふくらみを、私自身どう表現できるか？　それは特に、この作品のように、今の私達のまわりに起っている問題を取り上げているものは、自分自身が日常どう生きているかが勝負になっているような気がします。

ドラマの中で、三郎がボンに「何考えて生きてるんだ、この頃！」と問いつめるところがあります。このせりふは、撮影の間中、はやり文句になっていました。その答は、各人が、どんな顔をしても、どんなせりふを言っていても、きっと画面に写し出されていることでしょう。

「若者たち」「若者はゆく」は、私達にとって、それほどこわい作品です。

しわなんか、たるみなんか、顔中くしゃくしゃになったって、ものを見つめる目が光っていたら、ほんとに万才だと思うのですが。

若者はゆく

1

モーツァルトは三郎の心を無風状態に追いやった。凍固した手足はぬるま湯に浸されでもしたようにジワンとした痛みを伴って火照(ほて)っている。心の隅ずみまでゆったりと襞(ひだ)が開かれ、満ち足りた気持になる。三郎はベットのような大きなソファーに身を沈めて放心していた。

今、三郎はこの家に家庭教師に来ているのである。食事の用意が出来る迄の間、いつもそうするように広い応接室に一人待たされている。応接室はすべて一級品の調度で飾られていた。大きな肘掛椅子、ソファー、サイドテーブルは、そのシンプルで近代的な感覚から見て、外国のインテリアデザイナーの造ったものだろう。クッションは粋な色調のストライプ、絨氈(じゅうたん)は足の甲が埋まるほどの軟らかさ、木目の美しいサイドボードには三郎のお眼にかかったこともない外国の洋酒類が並んでいる。その上に置かれたウエストミンスターはちょと成金趣味だが、その隣の大きなクリスタルの花瓶はスタンドの軟らかい光を受けて豪華で繊細な光を放っている。きっと名のある北欧の切子硝子にちがいない。室の一面の大きな窓はバラの刺繍のついたレースのカーテンで覆われ、サッシのガラス戸とその外側のガラリ戸で密閉されている。正面の壁面には手の込んだ額縁にモジリアニの裸婦が架っている。複製だろうが立派なものだ。裸婦は甘美な官能にほてった美しい肢体をみせているが、透明なコ

バルトブルーの眼は妙に弱々しく虚ろである。三郎はモジリアニのデカダンな官能美には反発を感じるのだが、反面、その人間の持つ虚ろさには無意識に惹かれてしまう。いつもはそういう自分の気持に気づくと、弱々しいものとして拒否するのだが、今日はその気力を失っていた。

ステレオからは、モーツァルトのディベルティメント（喜遊曲）が流れていた。ディベルティメントは典雅な宮廷貴族の音楽である。この家ではいつも食事の際には必ずこの曲をかけるのだ。それはこの家の母親の趣味であった。三郎はいつもそれに猛烈な反発を感じるのだが、今日は妙に心にしみ込んで来る。＜疲れているのだ。心が凪いでいる＞と三郎は思った。いつもの元気が出て来ない。三郎は静かに眼を閉じると、清澄な音の洪水に身を浸した。平穏で平和な調和が身体の隅ずみまで満ちて来る。わずかに異和感を残しているのは、ぐっしょりと濡れた右足の靴下だけだ。こうしていると、ついさっきまでの喧騒、罵声、破壊も全く嘘のようだと三郎は思った。＜どちらが夢で、どちらが現実なのか？　どちらが狂気で、どちらが正気なのか？＞三郎は一瞬の錯覚に捕われた。

今日の午後、三郎の大学では学園闘争における、大学当局の不当処分と、機動隊導入に抗議する学内集会が大々的に持たれた。三郎の大学では数十億円に及ぶ理事達の汚職に端を発して学園紛争がこじれにこじれていた。運動部を中心とする右翼グループは、大学当局側に立って暴力を振い、これに対抗する学生側は、全学共闘と、それに相対する組織に大きく分裂しており、大部分の学生はノンセ

クトまたは無気力なネ（寝）トライキ派であった。流動的な学内情勢に応じて、それぞれの思惑で勝手に行動した。大学当局は理事者たちの汚職が明るみに出ているにもかかわず、決して自分達の椅子を開け渡そうとはしなかった。のみならず運動のリーダーを退学処分にし、機動隊を導入することにより、力によって上から押えつけようとした。

これに対し、学生側も、眼には眼を、歯には歯をと集団的な実力行使に及び、全学共闘会議の諸派が、激しくゲバ棒を振るい、しばしば運動部の右翼学生と暴力衝突を繰り返し、かなりの重傷者を出していた。

集会の開かれた大学本部前の広場は、各派の学生、及びそのシンパ、ノンセクトの学生達によって埋めつくされていた。集会はいよいよ最高潮に達し、シュプレヒコールの声が延々と学内に響き渡った。集会はこれをもって終るはずであった。が、突然、最前列に陣取っていた全共闘の連中がスクラムを組み始めた。

「市民にアッピール!!」

「市民にアッピールしよう!!」

彼等は口々に叫びながら正門めがけて突進しだした。それは今日の集会の予定には全くないことであったが、アッという間に広場中の学生達を捲き込んでいった。ノンセクトの学生も誰彼かまわずスクラムを組むと、正門前の大通りめがけて押し寄せていった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三郎は隣の久保山に腕を取られたまま、その奔流の中に押し流されていった。先頭のヘルメットに覆面スタイルの全共闘の尖鋭グループは、ゲバ棒を高くかかげ、道いっぱいの激しいジグザグデモを始めた。交通は一挙にストップし、商店は早くもシャッターを降し始めた。歩道の人々は慌わてて路地に逃げ込んだ。と、同時にそれまであらゆる路地や、裏道に待機していた機動隊がいっせいに楯を擁してデモ隊に襲いかかった。ゲバ棒もいっせいに振り下され、頭上をコンクリートのカケラがうなりを上げて飛び、機動隊の楯やヘルメットに当って、鈍い音をたてた。閉め遅れた商店のウインドガラスがひときわ派手な音を響かせて砕けた。

三郎は〈しまった！〉と思った。こういう無統制な自然発生的なデモ――乱闘はさけるべきだ。不必要な混乱と犠牲は出すべきではない。やるならもっと計画的な、効果的な示威があるはずだと思った。だが、一度火を噴いた大衆的なエネルギーは、個人的な考えのニュアンスの違いなど抹殺してしまう。こうなった以上は最も果敢に闘うことが最大の防御であり、折をみてサッと引くことが、犠牲を最少限にすると三郎は思った。

しかし、三郎がそう思った時はもう既に手遅れの感があった。機動隊の方が遙かに計画的であり、戦術的であった。デモの隊列は各路地から突進して来た機動隊により、みるみるうちに分断され始めた。三郎たちは百名程の集団に切られ、アッという間に学校のレンガ塀に押しつけられた。学生たちは機動隊の突然の出現に浮足立って押されっぱなしだ。

「押し返せ!!」
「敗けるな!! フンバレ!!」
三郎たちは両脇のスクラムをぐっと固め直して押し返した。三郎たちノンセクトの学生はゲバ棒をもっていない。だから、スクラムを堅くして押し返すだけだ。だが、機先を制した機動隊は獰猛であった。楯を前面にして学生たちをグイグイ押しまくる。楯の間からは警棒を突っ込んで学生たちの脾腹をキリキリともみ上げる。三郎たちには後がなかった。レンガ塀によって退路を断たれている。各所で女子学生たちの悲鳴が上り、男子学生の呻きがもれた。三郎は肋骨に激痛を感じると共に、押しつけられる圧力で息が止まった。肋骨が折れ、内臓が破裂する。死ぬ! と思った。眼の前が真っ暗になった。隣の女子学生の張り裂けた断末魔のような声で、ハッと我に返った。後は無我夢中であった。学生たちは逃げた。機動隊によって開かれた唯一の退路を、レンガ塀に沿って走った。機動隊に蹴り上げられ、警棒で殴られ、足をすくわれながら、三郎も逃げた。右足が下水の溝の中にはまり込み、靴が脱げた。三郎は大急ぎで靴を拾い、片ビッコのまま逃走した。

「先生、お食事が出来ました」
食堂に通じるドアの明るい空間に、すんなりと背の伸びたこの家の娘が立っていた。娘の名は、保美といい、私立山百合学園の高等科二年生であった。保美は大人びた肢体とは対照的に、丸い童顔を

したおとなしい娘である。

三郎はやっと我に返って食堂へ立っていった。食堂の大きなテーブルには既に母親と、一人息子の保憲が坐っていた。父親は滅多に顔をみせなかった。父親は病院の経営をしているが、九州の方にも大きな分院を持っており、一月のうち、半分以上は九州に行っていた。

三郎が席につくと、婆やさんが大きな皿に山ほど盛った牛肉のバターいためを運んで来た。輪切りにされたレモンが、赤く血のにじんだ肉の上にしぼられた。その湯気と香りが三郎のスキッ腹にたまらなかった。三郎の家では考えられないほどの牛肉のボリュームである。

＜畜生！　あるところにはありやがる。このボリュームは全く犯罪的だ！　ドケチの兄貴に見せたら、それこそ眼を丸くして、口をアングリ開けたまま、卒倒するゾ！＞

と三郎はいつも思うのだ。三郎にとって、この牛肉は、ブルジョアの象徴である。未だかって、こんなに沢山の牛肉が食卓に供せられたのを見たことがなかった。

＜妹のオリエや、弟のボンは一生かかったって、こんな牛肉にはお眼にかかれまい！＞

そう思うと三郎はこの牛肉に限りない憎しみと闘志を感じるのだ。

＜よーし、片っ端から片づけてやろう！＞

三郎は大いなる食欲を感じるとともに、やっと身体の中に生気が湧いてくるのを感じた。

「さあ、先生に敗けないくらいボクも食べなくちゃだめよ！」

母親が息子の保憲に言った。三郎はこの牛肉が保憲の好みによるものであることを知っている。保憲は中学三年になるが、男嗅さの全然ない、ひ弱な少年である。痩せて背が小さいために小学校六年か、やっと中学一年生ぐらいにしかみえない。母親の言によると、それは保憲の著しい偏食によるものとのことである。たしかに、三郎が一緒に食事をしてみてわかったのだが、保憲は魚類はいっさい食べなかったし、野菜類でも、ニンジン、ホーレン草、キャベツ、トマト等ほとんどのものに手を出さなかった。好きなものといえば、肉類と、カニやアスパラガスのカン詰ぐらいなもので、果物も生より、カン詰の方を好んだ。そのため、母親はしばしば食卓でヒステリーを起した。

三郎にとっては、偏食などということは、考えられないことだった。戦後の食糧難の中で育った三郎は、ただでさえ栄養失調気味だったし、空腹感は慢性化していた。だから食える物ならば何でも口の中に放り込んだ。セリ、ヨモギ、スカンポ、ツクシ、チューインガム代りには、タイヤのゴムまで噛んだ。

三郎の一家は終戦を満州で迎え、内地に引揚げてから千葉に住みついたが、一旗上げようとした父は不本意にも結核を患って、まもなく病没し、残された五人の子供をかかえ母親は惣菜屋をして頑張ったが、これまた過労がもとで死んだ。長男の太郎と次男の次郎は、残されたボロ家で、土方やトラックの運転手をしながら、三郎やオリエや末吉たち弟妹を育てて来た。だから三郎の一家は、常に貧乏と面と向って生きて来た。食物をあれこれと選んだり、好き嫌いをいっていたら、即座に餓死する

のみであった。ここ数年に到って、やっとわずかに生活に余裕が出て来て、三郎が大学へ行ける程になったが、依然として貧乏からは縁が切れなかった。

だから、三郎は保憲が偏食して贅沢な食物をあちこちと食い散らかし、大部分を残したりするのをみると、思わず怒りがこみ上げてくる時があるのだ。

＜こんなのが、大人になったら、一体どんな奴になるのだろう？　一般庶民や貧乏人の感情など全く解らない木偶の坊になってしまうのではないだろうか？＞

先日、三郎がやはりこの家にアルバイトに来ていた時、保憲が母親にこう言っているのを聞いた。

「ママ、鉛筆けずりだけどねェ、電池式のを買ってよ。電池一個で一年も持つんだぜ」

「だって、ボク、普通の二つも持ってるでしょ」

「今のはもう型が古いんだよ。それに、鉛筆のしんがすぐ折れちゃうんだもの、ダメだよ。電池一個で一年も持つんだもの、その方が合理的だよ！」

結局母親はそれを買わされた。それは鉛筆何ダースも買える値段であった。

この家で、三郎は、しばしば合理的という言葉を耳にする。母親も子供も何かにつけて、

＜その方が合理的よ！＞

と言うのが口癖のようだ。三郎はその言葉の使われ方を考えてみると、それは、時間的にも、労力的にも、そしてやり方においてスマートであるという点でも、その方が得だわよ、という程度の意味

らしい。確かにその意味においては、この家は合理的この上ない。冷暖房はすべてセントラルヒーティングだし、台所にはまばゆいばかりの電化製品が並んでいる。冷蔵庫、洗濯機はもちろんのこと、そこには、自動皿洗機だの、電子レンジまで置かれてあった。電子レンジによれば、あらゆる料理が、ごく短時間、普通二～三分位の間に、物が煮えたり、フカされたりしてしまうとのことであった。三郎はその電子レンジによる焼いもというのを食わされたことがある。イモの皮はこんがりと焼けて、実に美味そうにみえた。皮をむくと黄色い金時いもは、ホカホカと湯気を立てている。三郎は一口パクリと噛みついた。そしてとたんに眼を白黒させて胸を叩いた。

いもは確かに軟らかく焼けてはいたのであるが、水分がまったくないのである。まるで口いっぱいに、いもの粉を含んだ感じなのである。三郎はそれ以来、合理化製品には疑問を感ぜざるを得なくなった。

「佐藤先生、今日また、大学で乱闘が起ったそうざんすね。さっきのテレビでやってましたけれど、恐ろしいことですわ」母親が大げさな身ぶりでいった。

「頭蓋骨折の重傷者が、何人も出たんですって学生の方に。警官の方もコンクリの固りをぶっつけられたり、ゲバ棒でぶたれたり、あれじゃいくら商売だからといっても、いやざんしょうねえ！　それより何より、ひどいと思うのは、何の罪もない第三者の商店がこわされたり、他人の自動車をひっくり返して火をつけたりすることですわ、一体どういう気であんなことをするんでしょうねえ。ひどい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com